



〈R04162019〉

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

例) 3825番

↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

フッサールが『イデーン』で自ら行なっている現象学的還元を中心点を、一般読者に理解できるような仕方でも要約してみよう。

たとえば目の前に「机」があるとしよう。ふつうのものの見方(Ⅱ「自然的態度」)では、机の現実存在が原因であり、その結果として、私の「意識」に机の知覚像が現われる、とみなされる。「還元」の見方は、ここでの原因と結果を逆転させる。つまり、「私の意識に机の知覚像が現われているので、私は机が現実存在するという確信をもつ」となる。ここでは意識と原因であり、机がたしかに存在するという「確信」が結果である。

こうして、あらゆる対象の「存在確信」が「意識」における対象の与えられ方(Ⅱ所与性)を根拠として形成(Ⅱ「構成」)される、という a の変換が、「現象学的還元」の概念の要諦である。そしてここから、そもそもわれわれのさまざまな「認識」(確信の不可疑性)は、どのような意識内の条件において「構成」されるのか、という問いの設定が可能となる。つまり、この問題設定によって現象学は、世界認識の一般構成の原理論となるのである。

フッサールは『イデーン』において、対象確信の成立の構造についての内省、本質観取、純粹記述の作業(つまり現象学的還元)を、おそろしく詳細な仕方で行なっている。そして確信構成の基本構造を、顕在性、地平性、射映、背景の庭、ノエシスノエマ、内在―超越、といった多くの用語で示している。この煩雑さが読者の理解を大きく阻んでいくのだが、その根本構図はどこまでも明解である。フッサールが取り出している「事物対象」の確信構成の根本条件を、つぎの二点に要約しよう。

第一に、「意識」に知覚像が現出する(所与される)こと。

第二に、この知覚像が、一つの対象意味(Ⅱこれは机だ)を与え、さらにそれが時間的な「連続的調和」を維持しつづけること。

言い換えればこうなる。もし私の「意識」に、「机」の知覚像(想起や想像ではなく)が現われ、それが「机」という対象意味を私に与え、しかも時間的にこの知覚像+対象意味の統一が失われずと持続しているかぎり(その間中は)、私はこの対象を、実際に現実存在する「机」であると確信せざるをえない、と。

つけ加えると、机の知覚像は、意識に現われ出る体験流だから、つねに同一ではなく微妙に変化していく(これがノエシス)。しかしにもかかわらず、この連続的変化の中で、それはたえず「一つの机」であるという確信(これが対象ノエマ)を与え続ける。これが「ノエシスノエマ」構造と呼ばれる。

もう一つ、「意識」の体験流の現出(所与)というノエシスの側面は、私にとって本質的に不可疑なもので、ほんとうにそう現われているのかと問うことが無意味だが、「これは机だ」という構成された「確信」(ノエマ)は、時間の経緯のうちで、「そうだと思ったがじつはそうではなかった」ということが現われうる可疑性を必然的にもつ。これが「内在―超越」の構造である。そして、一般読者は驚くかもしれないが、余計なものをすべて取り除いて核心点だけを取り出せば、フッサールが『イデーン』で行なった事物対象の現象学的還元の要諦は、これでほぼ尽くされている。

つぎは、最も重要な箇所の一つ、知覚像はたえず変化しつづつ現われるが、しかしつねに「机」という同一の対象意味(ノエマ)を与え、それが連続的に維持されていることが対象確信の根本条件である、という箇所の引用である。

調和的な動機づけの連関によって、顕在的な知覚という私のそのつどの領圏と、以上記述されたような具合に結合されてゆくことのないような、何らかの超越物などは、一つの全く無根拠な想定であろう。このような結合を原理的に欠如しているような超越物などは、一つの無意味なものであろう。

現象学的還元とは、対象の存在や様態を「意識」における確信形成の構造として把握することである、という理解がなければ、この文章はほとんど謎であろう。フッサールの意は以下である。およそわれわれがその現実存在を確信する対象(Ⅱ「超越物」)は、必ず、われわれの「意識」に、ありありとした知覚像とその対象意味を連続的な調和を維持しつづつ与えてくるものだけである。そうした仕方でも与えられない対象は、決して「b」する対象」としての確信をわれわれに与えることはない、と。

さて、すでに示唆したように、フッサール現象学のこの根本構図は現代哲学者のみならず多くの現象学者たちによっても理解されておらず、そのために用語解釈についての大きな混乱と不明が蔓延している。いまいくつか重要なものを取り上げてみよう。

まずフツサールの直接の高弟であるオイゲン・フィンクによる、よく知られた「構成」概念への疑念。

この絶対的主観性には、(略)世界的に存在するものの「構成」が帰せられる。しかし「構成」とは何を意味するのだろうか。(略)フツサールが、構成の概念をはじめに語の素朴な使用から受け取ってそれに新しい種類の超越論的意味を割り当てるとき、彼にとっては、これらいつさいの意義は互いに錯綜しあって揺れ動いているのである。

フィンクは、「構成」の概念だけでなく、「現象」「エポケー」「超越論的論理学」といった用語も明確に定義されたものといえず「操作的概念」というほかはないと批判している。同じく直接の高弟、ラントグレーベも完全にフィンクに同じている。しかし、すでに確認してきた根本構図から、「構成」が、c 以外を意味しないことは明らかである。

つぎに「純粹意識」。これにも多くの疑義がある。たとえばロマン・インガルデンはいう。

問題なのは、《本質的な点において充分明確に確定されていない純粹意識の概念である。フツサールによるとき「意識」という概念は何を包括すべきなのか。(略)われわれはそれらの一つを確実に選びとることができない》。純粹意識は、志向的作用、質料的与件、ノエマなどの「すべてを指すのか一部を指すのか」よく分からず、そのため、意識流が「現実

に全き存在領域なのかそれともある特有の個別対象なのか」も不明確なままである、と。
現象学の中心的諸概念の理解についてのこうした混乱と不明は、いくらでも例を挙げることができる。「構成」や「純粹意識」の概念は、現象学的還元の方法の核をなすものであり、これらの概念に対する疑義は、現象学的還元³の概念自体に対する根本的無理解を意味している。

「現象学的還元」の基本構図を、私は誰にも理解できるような一つの具体例で示してみよう。

たとえば、目を閉じた状態で何かを渡してもらい、触るだけでそれが何であるかを言い当てるゲームを想定しよう。私は渡されたものを手で触って、これはたとえば自分の愛飲の洋酒ボトルだ、と答える。だが、相手がさらに、なぜそれが愛用の洋酒ボトルであると確信したかその根拠を言え、と要求するとしよう。すると私は、自分の触覚にいつそう注意を集中し、自分にその確信を与えた手触りのありようを、言葉で示そうとするだろう。

さて、鋭敏な読者は、この単純な現象学的「目隠しゲーム」から、現象学的還元、純粹意識、本質観取、純粹記述といった概念の意味を、誰であれ難なく取り出せることを理解するはずである。同時に、この例は、知覚体験における対象確信の「構成」の本質構造を内省によって誰もが観取できるということ、つまり、内省的な本質観取の原理的可能性ということをも明瞭に示している。

「純粹意識」(内在的意識)とは何か。この例で分かるように、君の内ですまざまな対象確信が形成される「意識」のありようを内省せよ、といわれれば、誰であれ、現にある自分の意識のありよう、にアクセスすることができ、その条件を観取して取り出すことができる。そして、「純粹意識」とは何かについて、この定義以上の議論を重ねるのはまさしくスコラ議論なのである。

もう一つの重要概念、「ノエシス・ノエマ」もまた大きな混乱のうちにある。ダン・ザハヴィは『フツサール現象学』の中で、フツサールの「志向性」の概念の解釈について、「西海岸解釈」(フェレスダール、ドレイファス、マツキンティアなど)と「東海岸解釈」(ソコロウスキ、ドラモンド、ハートなど)の間で生じている対立を報告している。前者、志向性概念の「フレイゲ的解釈」では、ノエマは《作用と対象の間の志向的関係を媒介する理念的意義あるいは意味》だとされる。これに対して後者では、ノエマは《主観と客観の仲介者ではなく、(略)現象学的反省において考察された対象自体(略)、知覚されるとおりの知覚された対象》とされる。

ただちに分かるのは、どちらの陣営にあっても「主観—客観」図式が取り払われていないということである。「確信形成(構成)」の内的条件を説明する、ということが現象学的還元の方法の要諦であり、このことの理解のないかぎり、「ノエシス・ノエマ」や「内在—超越」の概念もまた意味不明のものとなることをよく示している。

先の「目隠しゲーム」の例でいえば、ノエシスは、「意識」に現われる生き生きとした手触りの感触(その体験流)であり、ノエマは、そこから形成(構成)される「これは洋酒ボトルだ」という対象意味の確信形成(対象ノエマ)にはかならない。フツサールがノエマをしばしば「意味」と呼ぶのは、「これは洋酒ボトルだ」という確信が、対象の「意味」の直観的な到来だからである。

もう一つ、しばしば議論の対象となる概念に「間主観性」がある。たとえば、以下のような批判が多く存在する。フ

ツサールの「間主観性」の概念は、現象学があくまで「超越論的主観」を世界分析の絶対的起点とする以上、他者の本質に近づくことはできない、なぜなら超越論的主観がそもそも間主観性によって先構成されているからだ、といった批判である（日本の現象学者、新田義弘、谷徹ほか）。これについても一つの例を挙げて説明しよう。ただしこれはウィトゲンシュタインからの借用である。

人は皆自分自身についてこう語る。「私は、私自身の痛みからのみ、痛みの何たるかを知るのである！」——
そこで、人は皆或る箱を持っている、としよう。その中には、我々が「かぶと虫」と呼ぶ或るものが入っているのである。しかし誰も他人のその箱の中を覗く事は出来ない。そして、皆、自分自身のかぶと虫を見る事によつてのみ、かぶと虫の何たるかを知るのだ、と云うのである。

個人の「痛み」の **d** と交換不可能性について述べたくだりだが、われわれはこれを、現象学的「間主観性」の概念の一般モデルとみなすことができる。

すなわち、世界の総体を純粹意識に還元すればつぎのようになれる。各人は自分だけの「世界」（意識世界）を生きており、誰も他人の「世界」を直接に認識することはできない。それは原理的に交換不可能である。しかしにもかかわらず、人間は「言語ゲーム」を介して、互いに自分の「世界」のありようを交換している（伝えあっている）。そのことによつて、誰も自分の「世界」しか知りえないにもかかわらず、われわれは、例外なく、自分の世界と他人の世界は「同一の世界（かぶと虫）」に違いない、という自然かつ暗黙の確信をもっている、と。
そこでこう定式化できる。

現象学における「間主観性」とは、私の生きる「世界」は他者が生きる「世界」と同一のものであるはずだという「私の確信」を意味する。間主観的還元とは、私の主観のうちに成立するこの間主観的 **e** の構図を把握することにはかならない。

7 超越論的主観性はじつは間主観性に先行されている、といった批判は、私の意識は他者関係を前提しているという点では理があるので、一見説得力をもつ。しかし、現象学の理解としては、客観世界の「エポケー」という大前提を理解しておらず、そのため暗黙に、客観世界が主観世界に先行する、という「主観—客観」の構図に舞戻っているのである。

繰り返し言えば、現象学の中心課題が認識論の解明にあること、その根本方法は、すべての認識を主観のうちでの対象確信（「不可疑性」）の構成の把握に定位されること、このことを理解しないかぎり、哲学としての現象学から取り出さるものは何もない。ツサールのこの根本の発想を伝える象徴的な言葉がある。

世界が、絶えず全般的な合致へと合流してゆく連続的な経験において、存在する全体宇宙として与えられているということ、このことは、完全に疑いを容れない。けれども、生と実証的学とを支えるこの不可疑性を理解し、その不可疑性の正当性の根拠を解明することは、これはこれでまた全く別種の事柄であらう。

（竹田青嗣の文章による）

（注）ツサール……現象学を提唱したオーストリアの哲学者。主著に『イデー』がある。

純粹記述・顕在性・地平性・射映・背景の庭・領圏・志向的作用・質料的与件……ツサールが提唱した現象学的還元に関する用語。

体験流・意識流……体験や意識が時間的に発展し続ける側面を強調したツサールの用語。

エポケー……判断を保留すること。

スコラ議論……無駄な議論、議論のための議論。

超越論的主観……主観—客観の構図から超越した主観。現象学の用語。

言語ゲーム……言語活動をゲームに喩えたもの。ウィトゲンシュタインが提唱した。

問一 空欄 **a** に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 風景 口 時空 ハ 人称 ニ 価値 ホ 視線

問二 傍線部1「意識」に知覚像が現出する(所与される)こととあるが、著者はこれを端的に言い表すのに何という語句を用いているか。この傍線部よりも前の本文中から漢字四字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。

問三 傍線部2「ノエシス―ノエマ」構造とあるが、ここでの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 意識として知覚された像が断続的に変化する中で時間的に推移してしまつたため、何らかの統一的な知覚像を得にくいという構造。

ロ 意識に現われ続ける知覚像が連続的に変化していったとしても、途絶えることなく何らかの確信を持ち続けられるという構造。

ハ 意識に現れ、感じたものが知覚されると同様の仕組みで、想起や想像に対しても継続的に確信を持つことができるという構造。

ニ 想起や想像ではない知覚像を論理的に操作することによって対象意味を付与し続けなければ、対象を確信できないという構造。

ホ 想起や想像という意識が現われ、それが時間的に変化しても、対象意味の統一が失われないかぎりこの対象を確信できるという構造。

問四 空欄 b に入る語句として最も適切なものを本文中から五字以内で抜き出し、記述解答用紙の解答欄に記せ。なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ずマス用いること。

問五 空欄 c に入る適切な語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ フッサール現象学で理解不能な構成

ロ 語の素朴な使用から類推できる構成

ハ 操作的概念から生み出された構成

ニ 多くの現象学者が説明する構成

ホ 内在的意識における確信の構成

問六 傍線部3「現象学的還元概念自体に対する根本的無理解を意味している」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ フッサール以外の現象学者の多くは、実在性が原因になり、その結果として意識に対象の知覚像が現れているという自然的態度を受け入れていないということ。

ロ フッサール以外の現象学者の多くは、現象学的還元における構成が、多種多様な構成を指すというフッサールが示した見解を支持していないということ。

ハ フッサール以外の現象学者の多くは、現象学の扱う認識論が、確信の不可疑性が構成される条件および構造を問題にしていることを踏まえていないということ。

ニ フッサール以外の現象学者の多くは、純粹意識の範囲が、意識流という世界認識の一般構成の原理論として明確に示されている点を見落としているということ。

ホ フッサール以外の現象学者の多くは、現象学的目隠しゲームを通して、現象学的還元の基本構図を誰であれ難なく取り出せることに考えが及ばないということ。

問七 傍線部4「純粹意識」とあるが、現象学的「目隠しゲーム」のなかで、何がこれに相当するとしているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 目を閉じることで起こる覚醒
- ロ ゲームから想起された記憶
- ハ 他者存在が排除された体験
- ニ 現にある洋酒ボトルの手触り
- ホ 混じり気がなく高い集中力

問八 傍線部5「ノエマをしばしば「意味」と呼ぶ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 知覚像への作用と確信を与える対象との間にある、ノエマが意味を媒介するという内在的な働きによってノエマとその意味が強く結合しているから。
- ロ 対象の存在の確信とその意味の確信は同時に形成されるため、主観によって把握されるノエマには対象の意味が含まれることが多くなるから。
- ハ 情報の集約物である知覚像が人間に作用するということは、ノエマそれ自体に意味があると判断される性質が備わっていることに等しいから。
- ニ 対象自体を指すノエマは、知覚像と体験の結合から生じるのではなく、知覚された物自体がそのままノエマの意味を表しているから。

ホ 多義的な知覚像に対して、ノエマが特定の文脈を指し示すことで、知覚像についての解釈の幅を限定し、理解を助ける意味を持っているから。

問九 空欄 d に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 絶対的な独自性
- ロ 超越的な客観性
- ハ 基本的な優位性
- ニ 感覚的な志向性
- ホ 先験的な他者性

問十 傍線部6「われわれはこれを、現象学的「間主観性」の概念の一般モデルとみなすことができる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ すべての人は主観に依拠して世界を認識するしかないが、「言語ゲーム」を通して、例外なく自分自身の主観的確信の構成が他者のそれと同一の構造を有すると確信されるから。
- ロ 世界はその総体を純粹意識に還元できるので、各人が自分だけの世界は原理的に交換不可能であるにもかかわらず、本質的には他者と自己との間で同一であると仮定できるから。
- ハ 現実の「かぶと虫」という存在は、知覚像から誰しも「かぶと虫」であることを確認できるので、他者との間で言葉交わさなくても、共通理解が得られるから。
- ニ 人間は「言語ゲーム」によって多人数が同時参加する世界についての認識を交換できるため、通信の遅延がなければ世界が同一であると予想できるから。

ホ 各人は自分だけの交換不可能な世界を生きているため、自分の認識と他者の認識を同一にするためには、世界が同一であると想定しなければならないから。

問十一 空欄 e にあてはまる語句を本文中の表現を用いて三字以上、五字以内で記述解答用紙の解答欄に記せ。

なお、句読点や括弧・記号などが含まれる場合には、それぞれ一字分に数え、必ずマス用いること。

問十二 傍線部7「超越論的主観性はじつは間主観性に先行されている、といった批判」とあるが、著者はこの批判に對してどのように反論しているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 超越論的主観性と間主観性は、表面的な違いはあるが、主観性という人間の根幹となる共通の概念を含んでいるため、こうした批判自体が意味をなさない、と著者は反論している。

ロ 超越論的主観性が間主観性に先行されるという批判を受け入れた場合、他者を前提としない認識は成り立たず、確信構成の条件を再考しなければならない、と著者は反論している。

ハ 現象学の役割は正当性の根拠の解明なので、本来的な議論として、客観世界が主観世界に先行するという、主観と客観の構図をそもそも扱う必要はない、と著者は反論している。

ニ 現象学では他者の確信がどのように構成されているのかに對してさえも主観により確信が与えられるため、主観と客観という対比自体が成立しない、と著者は反論している。

ホ 自分の世界と他者の世界が同一の世界であるに違いはないことは、自然かつ暗黙の確信であるため、この考えに批判を述べるのは哲学者として相応しくない、と著者は反論している。

問十三 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 現象学的還元の方法は認識に関わる問題を明らかにしているにもかかわらず解釈論議が生まれるのは、フッサールより後の多くの現象学者たちが根本的に誤っているからである。

ロ フッサールによる現象学の動機は哲学の再生にあることには違いないが、現在から見れば古い考え方になってしまったので、新しい考えに刷新していく必要がある。

ハ 現象学の中心課題は、知覚像が連続的調和を維持することを通して生じる、超越物が存在するという確信が、どのような条件ならば疑いがないと言えるのかを解明することである。

ニ 認識は疑うことができない確信の構成として行われる性質があるため、知覚の不確かさが常に伴う人間の認識を通して客観的な知識を得ることはできない。

ホ 机などの対象を意識的に知覚することや自分の世界と他者の世界が同一のものだと捉えることは、自然な考え方であり、私たちに対象や世界についての確信を与える。

ヘ 主観と客観との対比関係に基づいて人間の認識を理解するという方法には改善すべき点も多いが、これらに對処すれば、最終的には倫理観を伴った考え方になる。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、多氣の大夫といふ者の、常陸より上りて愁へする比、向ひに越前守といふ人のもとに経誦しけり。この越前守は、伯の母とて世にめでたき人、歌よみの親なり。妻は伊勢の大輔、姫君たちあまたあるべし。多氣の大夫つれづれに覚ゆれば、聴聞に参りたりけるに、御簾を風の吹き上げたるに、なべてならず美しき人の、紅の一重がさね着たるを見るより、「この人を妻にせばや」といりもみ思ひければ、その家の上童を語らひて問ひ聞けば、「大姫御前の、紅は奉りたる」と語りければ、それに語らひつきて、「我に盗ませよ」といふに、「思ひかけず、えせじ」といひければ、「さらば、その乳母を知らせよ」といひければ、「それは、さも申してん」とて知らせてけり。さていみじく語らひて金百両取らせなどして、「この姫君を盗ませよ」と責め言ひければ、さるべき契りにやありけん、盗ませてけり。

やがて乳母うち具して常陸へ急ぎ下りにけり。跡に泣き悲しめど、かひもなし。程経て乳母おとづれたり。あさましく心憂しと思へども、いふかひなき事なれば、時々うちおとづれて過ぎけり。伯の母、常陸へかくいひやり給ふ。

匂ひきや都の花は東路に a のかへしの風のつけしは

返し、^ハ姉、

吹き返す a のかへしは身にしみき都の花のしるべと思ふに

³ 年月隔りて、伯の母、常陸守の妻にて下りけるに、姉は失せにけり。女二人ありけるが、かくと聞きて参りたりけり。田舎人とも見えず、いみじくしめやかに恥づかしげによりけり。「常陸守の上を、^ホ昔の人に似させ給ひたりける」とて、いみじく泣き合ひたりけり。四年が間、名聞にも思ひたらず、用事などいはずりけり。

任果てて上る折に、常陸守、「無下なりける者どもかな。かくなん上るといひにやれ」と男にいはれて、伯の母、上る由いひにやりたりければ、「承りぬ。参り候はん」とて、明後日上らんとての日、参りたりけり。えもいはぬ馬、一つを室にする程の馬十疋づつ、二人して、また皮籠^{カゴ}負はせたる馬ども百疋づつ、二人して奉りたり。何とも思ひたらず、かばかりの事したりとも思はず、うち奉りて帰りにけり。常陸守の、「ありける常陸四年が間の物は何ならず。その皮籠の物どもしてこそ万の功德も何もし給ひけれ。ゆゆしかりける者ども心の大きき広さかな」と語られけるとぞ。

⁴ この伊勢の大輔の子孫は、めでたきさいはひ人多く出で来給ひたるに、大姫君のかく田舎人になられたりける、哀れに心憂くこそ。

【宇治拾遺物語】に於て

※WEB掲載に際し、出典を追記しております。
日本古典文学全集50「宇治拾遺物語」による

(注) 愁へ……訴訟。

伊勢の大輔……小倉百人一首に入集している女流歌人で、越前守の妻。その子の一人に「伯の母」がいる。

皮籠……まわりに皮を張った籠。

問十四 波線部イの中^イの中で同じ対象を指していないものが一つある。それはどれか。最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

問十五 傍線部一「盗ませてけり」について、「誰」が「何(あるいは誰)」を「誰」に盗ませたのか。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 上童が紅の一重がさねを多氣の大夫に

ロ 上童が金百両を多氣の大夫に

ハ 上童が姫君を越前守に

ニ 乳母が紅の一重がさねを姫君に

ホ 乳母が姫君を多氣の大夫に

問十六 傍線部2「おとづれたり」について、ここでの「おとづる」と同じ意味になる語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ おとなふ □ かたらふ ハ たづぬ ニ たよりす ホ とむらふ

問十七 空欄 a に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 遠風 □ 南風 ハ 東風 ニ 微風 ホ 涼風

問十八 傍線部3「田舎人とも見えず、いみじくしめやかに恥づかしげによりけり」の現代語訳として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 娘たちは、田舎の人のようにも見えず、ひどくしとやかでこちらが気後れするほど美しかった。

□ 娘たちは、ふだんは周囲の住人に顔をみせることもなく、ひどくつましく恥づかしそうで、好ましい様子であった。

ハ 娘たちは、田舎の人のようにも見えなかったが、ひどくしとやかで出しゃばらない様子が好ましかった。

ニ 娘たちは、周囲の人々とまじわることもなく、ひどくしとやかで、見るものが気後れするほど美しかった。

ホ 娘たちは、田舎の人のようにも見えず、ひどく華やいだ様子で、周囲が気恥づかしくなるほどであった。

問十九 傍線部4「ゆゆしかりける者ども心の大きさ広さかな」とあるが、この発言からうかがえる常陸守の娘たちへの心情・評価として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自分の妻の姪たちであり、立派な気構えの人間だと思っていたが、任地を離れる自分たちに豪華な手土産を渡す豪胆さにあらためて感心している。

□ 赴任の際に再会したあと、叔母である自分の妻を頼る様子もなく、人情味のない娘たちだと思っていたが、別れに当たって、惜しむことなく贈り物をする気持ちの大きさに驚いている。

ハ 幼いころは田舎育ちと身なりから品のない娘たちだと思っていたが、常陸赴任中の自分たちへの接し方を通じて、彼女たちのやさしい気立てを発見している。

ニ 自分が常陸に来て以来、自分たちを頼ってこず、ひどい娘たちだと思っていたが、別れに当たっての豪華な贈り物から、その背景にあった財力の大きさを知って納得している。

ホ 赴任以来の態度から、人としてのあたたかさのない娘たちだと思っていたが、儀礼的ではあれ、別れを惜しむ姿を目の当たりにして、自分たちへの愛情に感動している。

問二十 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 常陸に下った姉の娘たちは、伯の母と面会した際、京にいた頃の母親そっくりに美しく育っていた。

□ 常陸守は、四年の任期が明けて京に帰ったのちも、常陸の姫君たちと長年にわたって親しく交流した。

ハ 越前守の娘は、伯の母とその姉の二人きりであり、伯の母は姉が常陸に下った際、別れをひどく悲しんだ。

ニ 乳母は、多氣の大夫や姫君とともに常陸へ下ったのち、都での振る舞いについての自責の念に苦しみ続けた。

ホ 常陸守の帰京にあたって姉の娘たちが準備した土産の品は、常陸守が任期中に得たものよりも豪華であった。

ヘ 語り手は、娘たちの度量に驚きつつも、彼女たちの母親が田舎に埋もれてしまったことを惜しんでいる。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

武蔵坊弁慶、生^{マレテ}未^ニ数月^{ナラ}、有^リ食牛之氣^ニ。幼時^キ、父命^{ジテ}登^リ叡山^ニ、入^{リテ}某師室^ニ、受^{ケシム}剃度^ヲ。及^ニ長^ク、倣儻不羈^{ニシテ}、与^テ老壮僧徒^ト、無日不諍鬪。故^ニ為^リ衆擯出^{セラレテ}。下^リ山、遊^ニ俠洛陽^ニ。自謂^{ヘラク}人貯^ニ一色^ノ、武器滿千者^ヲ、謂^フ之^ヲ富^ト。我宜^{シク}得^ニ千刀^ヲ。每^レ見^ル人佩^ニ裝刀^ヲ、強乞^フ。多^{クハ}恐^{レテ}与^レ之^ヲ。一日邂逅^ス牛若丸^ニ于清水寺^ニ。貪^リ看^テ其金、装刀^ヲ、亦乞^フ之^ヲ。丸笑^{ヒテ}答^{ヘテ}曰^ク、須^ニ角臂力^ヲ以得^ル之^ヲ。慶易^ク少年稚弱、抽^{キテ}大刀^ヲ、相向^フ。丸雅^{モヒヨリ}有^ニ奇術^ヲ。飛捷奮擊^{ンテ}、非^ニ人力所到^ル也。慶忽^チ力屈術^ヲ、尽^{キテ}扣頭^{シテ}乞^フ降^{ランコトヲ}。丸詰難^{シテ}而後^ニ寬赦^シ、以^テ成^ス君臣之約^ヲ。爾後^{クシ}、節致^シ忠^ヲ、未^ダ暫^{クモ}離^レ側^ヲ。遂^ニ至^リ于衣川之難^ニ、義死^{シテ}殉^ル君^ニ。吁^{ああ}慶一旦^ノ暴惡、翻^{リテ}成^ル全人^ト、与^テ晋周処^ト、同日^ニ之談^ヲ耶。

〔桑華蒙求〕による

(注) 叡山……比叡山。

倣儻……物事に拘束されないさま。

擯出……退けること、拒まれること。

洛陽……京都の別名。

角臂力……「臂力」は、ちから。「角」は、くらべる意。

衣川之難……奥州平泉の衣川での戦い。

周処……晋代の人。仕官する前、村の父老から、南山の白額（オビ）の猛虎、長橋下の蛟（カマ）、乱暴者のお前が除かれない。うちは、豊年で天下太平でも気が休まらなと言われるや、ただちに虎を射殺し、蛟を打ち殺し、自らは志を励まして学問を修めたという。

問二十一 傍線部1「長」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 仲間の頭となること
- ロ 修行が他者に勝ること
- ハ 修行する期間が延びること
- ニ 剃髪した髪が伸びること
- ホ 成長して大人になること

問二十二 傍線部2「与老壮僧徒、無日不諍鬪」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 老年・壮年の僧徒のために、諍いさかいを起こさない日は無かった
- ロ 老年・壮年の僧徒とは、一日と経たずに諍いさかいを起こさないようになった
- ハ 老年・壮年の僧徒との間で、諍いさかいを起こさない日は無かった
- ニ 老年・壮年の僧徒と仲間になって、すぐに諍いさかいを起こさなくなった
- ホ 老年・壮年の僧徒と徒党を組み、諍いさかいを起こさない日は無かった

問二十三 傍線部3「須角臂力以得之」の書き下し文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ りよりよくをくらぶるをまちでもつてこれをえんと
- ロ すべからくくらぶるりよりよくをもつてこれをえしむべしと
- ハ りよりよくをくらぶるをもちひてもつてこれをえよと
- ニ すべからくりよりよくをくらべてもつてこれをうべしと
- ホ りよりよくをくらぶるをもちふるにこれをうるをもつてせよと

問二十四 傍線部4「易」の表す意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 辟へき易えきする
- ロ あなどる
- ハ 取つて代わる
- ニ 占う
- ホ 交渉する

問二十五 傍線部5「非人力所到也」の返り点として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 非ひ人力にんりく所しよ到たう也
- ロ 非ひ人力にんりく所しよ到たう也
- ハ 非ひ人力にんりく所しよ到たう也
- ニ 非ひ人力にんりく所しよ到たう也
- ホ 非ひ人力にんりく所しよ到たう也

問二十六 傍線部6「与晋周処、同日之談耶」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 暴悪の人も立派な人となるという点で、中国の晋の周処の話と軌を一にしている
- ロ 暴悪の人も立派な人となる点があるが、中国の晋の周処の話とは時代的に価値が同じでない
- ハ 暴悪の人も立派な人となる話で、中国の晋の周処の話と真似して創作したものである
- ニ 暴悪の人も立派な人となるのは稀なので、中国の晋の周処に同じく一日では話しきれない
- ホ 暴悪の人も立派な人となるのは同様だが、中国の晋の周処の話ときっかけが異なる

〈R04162019〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					



--

11 (大学使用欄)

--

4 (大学使用欄)

--

2 (大学使用欄)

〈R04162019〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

問十一

3

5

問四

5

問二

4

国語 記述解答用紙